The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	上博楚簡『顔淵問於孔子』と儒家系文献形成史
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	中国研究集刊. 2012, 55, p. 40-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58712
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊 剣号（総五十五号）平成二十四年十二月 四〇―五三頁

上博楚簡『顔淵問於孔子』と儒家系文献形成史

湯浅邦弘

序言

二〇一一年五月、『上海博物館蔵戦国楚竹書』第八分冊が刊行された。その中には、『顔淵問於孔子』（顔淵 孔子に問う）と題する儒家系古逸文献（竹簡十四枚）が含まれていた。その内容は、顔淵が、孔子に「君子が国内の政治に従事する場合にどのような道がありますか」と問うものである。文章の一部は、『論語』に類似する点もあるが、竹簡の乱れも多く、読解に困難を来している。

そこで本稿では、まず、この文献の釈文を提示し、全体の意味を確認したい。次に、この文献からうかがうことのできる顔淵像や孔子集団の特色を考察する。さらに、これらと伝世儒家系文献とを対比することにより、本文献の思想的特質を明らかにするとともに、先秦における儒家系文献の形成過程について若干の私見を述べることとしたい。

一、『顔淵問於孔子』概要

まず、竹簡の概要を確認する(注1)。

①この竹簡は、泥塊の表層に付着していたため、損壊と散佚があり、確認できる竹簡は全十四簡である。これ以外にも、残簡があると推測される。

②完簡である第七簡およびその他の竹簡の現状から総合的に分析して、簡長は四十六・二センチ、幅〇・六センチ、厚さ〇・一二センチ。

③竹簡の両端は平斉で、三道編綫。

④契口は右端にあり、各竹簡は、上端から第一契口までが二・六センチ、第一契口から第二契口までが二十・五センチ、第二契口から第三契口までが二十・五センチ、第三契口から下端までが二・六センチ。

⑤文字は、第一契口から第三契口までの間に記されており、各簡三十一字前後。総字数三百十三字。内、合文七、重文六。

⑥本篇は儒家系古逸文献で篇題はなく、「顔淵問於孔子」は首句に基づく仮称である。ただ、左図のように実際には、「顔」字は首字ではなく、この上に一字分の欠損がある。また、この簡自体が首簡でない可能性も残る。

二、『顔淵問於孔子』釈読

原釈文（担当は濮茅左氏）は、全十四簡とし、1～14に配列するが、復旦吉大古文字専業研究生聯合讀書會によって、次のような再配列案が示されている(注2)。

1＋（12A＋2B）＋（2A＋11＋12B）＋5＋6＋7＋9＋10

この再配列案によっても、意味の接続しない竹簡3・4・8・13・14が残るが、第十簡までは一応文義が取れるので、以下、これに従って釈読を進める。

なお、第十簡末尾が一応本文の末尾と考えられるが、原釈文は、この下に脱文があるとし、聯合讀書會は第八簡と文意がつながるとする。

以下、「▪」は重文符号、【1】【2】などの数字は竹簡番号、A・Bは破断した竹簡の上部と下部であることを示す。また、「　」内の漢字は、竹簡欠損部を文意に基づいて補ったものである。

【原文】

□顔淵問於孔〓（孔子）曰、「敢問君子之内事也有道乎」。

孔〓（孔子）曰、「有」。

顔淵、「敢問何如」。

孔〓（孔子）曰、「敬又（宥）征（過）、而【1】［先］有司、老〓（老老）而慈幼、豫絞而收貧、祿不足則請、有余則辭。【12A】敬又（宥）征（過）、所以爲樂也。先【2B】［有］司、所以【2A】得情。老〓（老老）而慈幼、所以處仁也。豫絞而收貧、所以親【11】也。祿不足則請、有余【12B】則辭、所以明信也。蓋君子之内事也如此矣」。

顔淵曰、「君子之内事也、回既聞命矣。敢問【5】君子之内教也有道乎」。

孔〓（孔子）曰、「有」。

顔淵、「敢問何如」。

孔〓（孔子）曰、「修身以先、則民莫不從矣。前【6】以博愛、則民莫遺親矣。導之以儉、則民知足矣。前之以讓、則民不争矣。或（又）迪而教【7】之、能〓（能能）、賤不肖而遠之、則民知禁矣。如進者勸行、退者知禁、則其於教也不遠矣」。

顔淵曰、「【9】君子之内教也、回既聞矣〓（矣已）。敢問至明（名）」。

孔〓（孔子）曰、「德成則名至矣。名至必卑身〓（身、身）治大則（則大）祿【10】。

〈残簡〉

［君子讓］而得之、小人争而失之。【8】

示則斥、而母（毋）谷（欲）・（得）安（焉）。【14】

竝（素？）行而信、先尻（處）忠也、貧而安樂、先尻（處）【13】

内矣。庸言之信、庸行之敬【4】

必不在茲之内矣。顔淵西【3】

【訓読】

□顔淵 孔子に問いて曰く、「敢て問う、君子の内事に道有るか」。

孔子曰く、「有り」。

顔淵、「敢て問う、何如」。

孔子曰く、「敬みて過ちを宥して、有司を［先］にし、

老を老(うやま)いて幼を慈しみ、絞を予して貧を収め、禄足らざれば則ち請い、余り有れば則ち辞す。敬みて過ちを宥すは、楽を為す所以なり。[有]司を先にするは、情を得る所以なり。老を老いて幼を慈しむは、仁に処る所以なり。絞を予して貧を収むるは、親を取る所以なり。禄足らざれば則ち請い、余り有れば則ち辞すは、信を明らかにする所以なり。蓋し君子の内事は、回既に命を聞く。敢て問う、君子の内教に道有るか」。

孔子曰く、「有り」。

顔淵、「敢て問う、何如」。

孔子曰く、「身を修めて以て先んずれば、則ち民従わざる莫し。前みて以て博く愛すれば、則ち民親を遺(わす)る莫し。之を導くに倹を以てすれば、則ち民足るを知る。之を前むるに譲を以てすれば、則ち民争わず。又迪(みちび)きて之を教うるに、能を能とし、不肖を賤として之を遠ざくれば、則ち民禁を知る。如し進む者行いを勧め、退く者禁を知れば、則ち其の教に於けるや遠からず」。

顔淵曰く、「君子の内教は、回既に聞けり。敢て至名を問う」。

孔子曰く、「徳成れば則ち名至る。名至れば必ず身を卑くす。身治まれば則ち大いに禄あり」。

〈以下、連接未詳の残簡〉

[君子は譲りて] 之を得、小人は争いて之を失う。

示則斥、而母（毋）谷（欲）・（得）安（焉）。

竝（素？）行而信、先尻（處）忠也、貧而安樂、先尻（處）

内矣。庸言は之れ信にし、庸行は之れ敬しむ。

必不在茲之内矣。顔淵西

【現代語訳】

顔淵が孔子にたずねた、「あえておうかがい致します。君子が国内の政治に従事する場合にとるべき道がありますか」。

孔子は言われた、「有る」。

顔淵、「あえておうかがい致します。どのようなものでしょうか」。

孔子は言われた、「謹んで過失を許し、役人に率先してやらせ、老人を敬い幼児を慈しみ、徴税を猶予して貧

困者を収容し、俸禄が不足していれば請求し、余裕があれば辞退する。謹んで過失を許すのは、楽しみをなすためである。役人に率先してやらせるのは、実情を得るためである。老人を敬い幼児を慈しむのは、仁によるためである。徴税を猶予して貧困者を収容するのは、親しみを得るためである。俸禄が不足していれば請求し、余裕があれば辞退するというのは、信頼を明らかにするためである。思うに君子が国政に従事するのはこのようである」。

顔淵が言った、「君子が国政に従事する点については、すでにお言葉をうかがいました。あえておうかがい致します。君子が国内で民を教導する場合に、とるべき道はありますか」。

孔子は言われた、「有る」。

顔淵、「あえておうかがい致します。どのようなものでしょうか」。

孔子は言われた、「吾が身を修めて率先すれば、民は必ず従うであろう。積極的に民を広く愛すれば、民は親愛の情を忘れない。倹約の精神で民を教導すれば、民は満足を知る。謙譲の精神で民を進めさせれば、民は争うことがない。また民を教導するときに、能力あるものを能力あるものとして認め、不肖の者を劣っているとして遠ざければ、民は禁（何が評価され、何が評価されないのか）を知る。もし進む者が積極的に行動し、退く者が禁を知れば、その教導の目的が達せられるのも遠くはなかろう」。

顔淵が言った、「君子が国内で教導する場合についてはすでにうかがいました。あえて名を致すことについておうかがい致します」。

孔子は言われた、「徳が完成すれば自ずから名はついて来る。名が至れば、必ず身を低くする。そのようにして身が治まっていれば、大いに禄が得られるであろう」。

〈連接未詳の残簡部の現代語訳〉

〈第8簡〉

君子は譲って（そのことによってかえって）獲得し、小人は争って（そのことによってかえって）失う。

〈第4簡〉

日常の言葉にいつわりがないようにし、日常の行動を慎む。

【語注】

①内事……国内の政事。『穀梁伝』荘公十一年に、「公敗宋師于鄑。内事不言戰、舉其大者、其日、成敗之也」。宮中のこと。『周礼』春官・世婦に、「凡内事有達於外官者、世婦掌之」。宗廟の祭り、または内神（一家の神）を祭ること。『礼記』曲礼下に、「踐阼臨祭祀内事曰孝王某、外事曰嗣王某」。但し、原釈文は一説として「入事」とし、陳偉(注3)はさらに「入仕」に読み、黄人二・趙思木(注4)もそれを是とする。しかし、顔淵の二番目の質問が「内教」なので、ここも「内事」とする方が対応がよいと思われる。

②敬又（宥）征（過）……「征」字、原釈文は「正」に読み、聯合讀書會は待考とする。黄人二・趙思木は「苟有荒」に読むが、意味が取りづらい。蘇建洲(注5)は「禍」、鄭公渡(注6)はさらに「過」に読み、この句を「敬宥過」とする。字形からはやや連想しにくいが、意味的にはそのようになると推測される。

③豫絞……聯合讀書會に従い、「豫絞」と読み、賦税の免除の意に取る。なお、黄人二・趙思木は、「豫絞」と認定した上で、「逸労」と読み、労働者を休息させることとする。

④内教……陳偉は、はじめの「入仕」に対応させて、「入教」と読むが、「使教化深入人心」という理解にやや無理がある。この一段は、君子がいかに国内の民を教導し教化していくべきかを説いているので、やはり「内教」と読みたい。

⑤能〓（能能）……黄人二・趙思木は、前の句に続けて「教之以能」に読むが、やはり重文符号を重視して、「能能」に読み、能力ある者を能力あるものとして適正に評価する、の意と取りたい。

⑥矣〓（矣已）……原釈文は、「矣已」と解する。聯合讀書會は、この「〓」を衍字とし、黄人二・趙思木は、「命矣」に改める。確かに、はじめの顔回の言葉「回既聞命矣」と比較すれば、ここは「命」字がなく重文符号は余分ということになるが、強いて前句に揃える必要はないと思われる。

三、顔淵像の特色

さて、この文献でまず注目したいのは、孔子に質問しているのが顔淵だという点である。もっとも、『論語』にも、孔子と顔淵との会話は認められるが、このような問答は確認できない。そこで、伝世文献における代表的な顔淵像を確認してみよう。

①子曰、「回也其庶乎、屢空。賜不受命、而貨殖焉、億則屢中」。（子曰く、「回や其れ庶きか、屢空し。賜は命を受けずして貨殖す。億れば則ち屢中る」。）（『論語』先進篇）

②孔子曰、「賢哉回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回也不改其樂」。（孔子曰く、「賢なるかな回や。一簞食、一瓢飲にして、陋巷に在り、人其の憂いに堪えざるも、回や其の楽しみを改めず」。）（『史記』仲尼弟子列伝）

③孔子謂顔回曰、「回、來。家貧、居卑、胡不仕乎」。顔回對曰、「不愿仕。回有郭外之田五十畝、足以給飦粥。郭内之田十畝、足以為絲麻。鼓琴足以自娛、所學夫子之道者、足以自樂也。回不愿仕」。（孔子顔回に謂いて曰く、「回、来たれ。家貧しく、卑しきに居る。胡ぞ仕えざるやと」。顔回対えて曰く、「仕うるを願わず。回 郭外の田五十畝有り、以て飦粥を給するに足る。郭内の田十畝、以て絲麻を為るに足る。鼓琴以て自ら娛しむに足り、夫子に学ぶ所の道は、以て自ら楽しむに足るなり。回は仕うるを願わず」。）（『荘子』襄王篇）

④顔淵問於孔子曰、「淵願貧如富、賤如貴、無勇而威、與士交通、終身無患難、亦且可乎」。孔子曰、「善哉回也。夫貧而如富、其知足而無欲也。賤而如貴、其讓而有禮也。無勇而威、其恭敬而不失於人也。終身無患難、其擇言而出之也。若回者、其至乎。雖上古聖人、亦如此而已」。（顔淵孔子に問いて曰く、「淵願わくは貧にして富み、賤にして貴く、勇無くして威あり、士と交通して、終身患難無きも、亦た且つ可ならんか」。孔子曰く、「善きかな回や。夫れ貧しくして富むが如きは、其れ足るを知りて欲無きなり。賤にして貴きが如きは、其れ讓りて礼有るなり。勇無くして威あるは、其れ恭敬にして人を失わざるなり。終身患難無きは、其れ言を択びて之を出だすなり。回の若きは、其れ至れるかな。上古の聖人と雖も、亦た此くの如きのみ」。）（『韓詩外伝』巻十）

⑤顔淵問為邦。子曰、「行夏之時、乘殷之輅、服周之冕、樂則韶舞。放鄭聲、遠佞人。鄭聲淫、佞人殆」。（顔淵邦を為めんことを問う。子曰く、「夏の時を行い、殷の輅に乗り、周の冕を服し、楽は則ち韶舞。鄭声を放ち、佞人を遠ざく。鄭声は淫、佞人は殆し」。）（『論語』衛霊公篇）

このように、顔淵は、伝世文献の中では、通常、出仕（俸禄の受給）を願わず清貧の生活を送ったとされる。

最も著名なのは、上記の資料①②の孔子の言葉であろう。資料③④も同様であるが、特に③の資料では、顔回は仕官を願わなかったと明言されている。こうした一面が、やがて、常に心を虚しくしていたという道家的な顔淵像を形成していくのであろう(注7)。

では、顔淵は政治に全く関心がなかったのであろうか。この点について明確なことは分からないが、資料⑤のように、『論語』の中で、「邦を為める」方法について質問している箇所がある。とすれば、伝世文献において、顔淵は、主として、政治に背を向けて清貧の生活を送ったとされるが、わずかに、政治に関心を持って孔子に質問するという一面もあったことが分かる。

一方、この『顔淵問於孔子』に登場する顔淵は、出仕に深く関わる「内事」「内教」「至名」について次々と孔子に質問している。「敢て問う」という連続的な質問は、政治に対する顔淵の強い意識を表しているように感じられる。従って、『顔淵問於孔子』における顔淵像は、顔淵も実は政治に深い関心を抱いていたという一面を強調したものであると言えよう。顔淵は孔子よりも早く亡くなったが、その徳を偲び、彼を顕彰しようとする後学たちがいたことを推測させる。『顔淵問於孔子』の特色は、まずこの点に求められるであろう。

四、儒家と為政

次に注目したいのは、問答の内容である。「内事」「内教」「至名」とも、国内での政治活動を想定した質問であり、為政を目指した儒家集団のあり方を端的に示している。特に、俸禄の受給について説く点は、『論語』にも見える注目点である。

①子張學干祿。子曰、「多聞闕疑、慎言其餘、則寡尤。多見闕殆、慎行其餘、則寡悔。言寡尤、行寡悔、祿在其中矣」。(子張 祿を干(もと)むるを学ぶ。子曰く、「多く聞きて疑わしきを闕(か)き、慎みて其の余を言えば、則ち尤(とが)寡なし。多く見て殆きを闕き、慎みて其の余を行えば、則ち悔寡なし。言に尤寡なく、行に悔寡なければ、祿其の中に在り」。)(『論語』為政篇)

②子曰、「君子謀道不謀食。耕也、餒在其中矣。學也、祿在其中矣。君子憂道不憂貧」。(子曰く、「君子は道を謀りて食を謀らず。耕して餒(うえ)其の中に在り。学びて祿其の中に在り。君子は道を憂えて貧しきを憂えず」。)(『論語』衛霊公篇)

③公曰、「祿不可後乎」。子曰、「食為味、味為氣、氣為

志、發志為言、發言定名、名以出信、信載義而行之、祿不可後也」。（公曰く、「祿は後にすべからざるか」。子曰く、「食は味を為り、味は気を為り、気は志を為る。志を発して言を為り、言を発して名を定む。名は以て信を出し、信は義を載いて之を行う。祿は後にすべからざるなり」。）（『大戴礼記』四代篇）

④賢能失官爵、功勞失賞祿、爵祿失則士卒疾怨、兵弱不用、曰「不平」也。不平則飭司馬。（賢能 官爵を失い、功労 賞祿を失い、爵祿失えば則ち士卒疾怨し、兵弱くして用いられざるを「不平」と曰うなり。平かならざれば則ち司馬を飭む。）（『大戴礼記』盛德篇）

『論語』の中で、俸祿を求める方法について質問したのは、資料①に見えるように、孔子の弟子の子張であった。孔子はそのような露骨な姿勢をたしなめているが、俸祿を求めること自体を否定しているわけではない。資料③④に見えるように、儒家系の伝世文献でも、俸祿の重要性は明確に説かれている。

資料③では、その直前部分で、孔子が、「職は功績ある者に念を入れて手厚くする」と説いたのに対して、哀公が、「祿は後にすべきではないのか」と問う。これに答えて孔子は、「名は信を出し、信は義を行うためのものだから、祿は後にすべきではない」とする。また資料④でも、長幼の序、君臣の義が失われれば、有徳者も官職を失い、功労者も賞祿を失い、爵祿を失えば、士卒はそれを怨んで仕事を怠り、兵は弱体化して用をなさなくなる、と説かれている。

そして同様に、『顔淵問於孔子』においても、孔子は、俸祿が不足していれば請求し、余裕があれば辞退するというのが、信頼を示す方法だと説いている。必ずしも文言が一致しているというわけではないが、これらの資料は、儒家において爵祿が人間の信義の裏付けになるものとして重視されていたことを示しているであろう。そして、儒家自身は、そうした裏付けのもとに政治活動を推進しようとしていたのである。

儒家集団は、決して純粋な学術研究集団だったのではない。為政者となることによって自らの理想をこの世に実現しようと考えたのである。そのためには、俸祿を得る、すなわち仕官することが大前提であった。この文献は、そうした儒家集団の性格をよく表していると言えよう。

五、儒家系文献の形成

最後に、この文献で注目されるのは、部分的に『論語』『孝経』『易』『礼記』『仲弓』『荀子』などとの類似箇所が見られる点である。以下に、該当部分を掲げてみる。

①敬又（宥）征（懲）、而【先】有司、老〓（老老）而慈幼

・仲弓為季氏宰、問政。子曰、「先有司、赦小過、舉賢才」。（仲弓 季氏の宰と為り、政を問う。子曰く、「有司を先にし、小過を赦し、賢才を挙げよ」。）（『論語』子路篇）

・老老慈幼、先有司、舉賢才、宥過赦罪。（老を老い幼を慈しみ、有司を先にし、賢才を挙げ、過ちを宥し罪を赦せ。）（上博楚簡『仲弓』）

②修身以先、則民莫不從矣

・欲政之速行也者、莫若以身先之也。欲民之速服也者、莫若以道御之也。（政の速やかに行われんことを欲する者は、身を以て之に先んずるに若くは莫きなり。民の速やかに服することを欲する者は、道を以て之を御するに若くは莫きなり。）（『大戴礼記』子張問入官篇）

③前以博愛、則民莫遺親矣。

・先之以博愛、而民莫遺其親。陳之於德義、而民興行。先之以敬讓、而民不爭。導之以禮樂、而民和睦。示之以好惡、而民知禁。（之に先んずるに博愛を以てすれば、而ち民其の親を遺るること莫し。之に陳ぶるに德義を以てすれば、而ち民興り行う。之に先んずるに敬讓を以てすれば、而ち民争わず。之を導びくに礼楽を以てすれば、而ち民和睦す。之に示すに好悪を以てすれば、而ち民禁を知る。）（『孝経』三才章）

・公曰、「寡人雖無似也、願聞所以行三言之道、可得聞乎」。孔子對曰、「古之為政、愛人為大。所以治愛人、禮為大。所以治禮、敬為大。敬之至矣、大昏為大、大昏至矣。大昏既至、冕而親迎、親之也。親之也者、親之也。是故君子興敬為親、舍敬、是遺親也。弗愛不親、弗敬不正。愛與敬、其政之本與」。（公曰く、「寡人無似なりと雖も、願くは三言を行う所以の道を聞かん、聞くを得べきか」。孔子対えて曰く、「古の政を為すは、人を愛するを大と為す。人を愛するを治むる所以は、礼を大と為す。礼を治むる所以は、敬を大と為

す。敬の至りは、大昏を大と為す。大昏は至れり。大昏既に至り、冕して親迎するは、之を親しむなり。之を親しむは、之を親しましむるなり。是の故に君子は敬を興して親しむことを為す。敬を舎つるは、是れ親しむるを遺るるなり。愛せざれば親しまず、敬せざれば正しからず。愛と敬とは、其れ政の本か」。）（『礼記』哀公問篇）

・子曰、「夫民教之以德、齊之以禮、則民有格心。教之以政、齊之以刑、則民有遯心。故君民者子以愛之、則民親之。信以結之、則民不倍。恭以涖之、則民有孫心。（子曰く、「夫れ民は之を教うるに德を以てし、之を斉うるに礼を以てすれば、則ち民 格心有り。之を教うるに政を以てし、之を斉うるに刑を以てすれば、則ち民 遯心有り。故に民に君たる者は子のごとくして以て之を愛すれば、則ち民之に親しむ。信以て之を結べば、則ち民倍かず。恭以て之に涖めば、則ち民 孫心有り。）（『礼記』緇衣篇）

④導之以儉、則民知足矣。

・九曰以度教節、則民知足。（九に曰く度を以て節を教うれば、則ち民足るを知る。）（『周礼』地官司徒・大司徒）

⑤前之以讓、則民不爭矣。

・大司徒之職……、而施十有二教焉。一曰以祀禮教敬、則民不苟。二曰以陽禮教讓、則民不爭。三曰以陰禮教親、則民不怨。四曰以樂禮教和、則民不乖。（大司徒の職……、而して十有二の教えを施す。一に曰く祀礼を以て敬を教うれば、則ち民苟にせず。二に曰く陽礼を以て讓を教うれば、則ち民争わず。三に曰く陰礼を以て親を教うれば、則ち民怨まず。四に曰く楽礼を以て和を教うれば、則ち民乖かず。）（『周礼』地官司徒・大司徒）

⑥德成則名至矣。名至必卑身〓（身、身）治大則（則大）祿

・故曰、貴名不可以比周爭也、不可以誇誕有也、不可以埶重脅也、必將誠此然後就也。爭之則失、讓之則至。遵道則積、誇誕則虛。故君子務脩其内、而讓之於外。務積德於身、而處之以遵道。如是、則貴名起如日月、天下應之如雷霆。故曰、君子隱而顯、微而明、辭讓而勝。（故に曰く、貴名は比周を以て争うべからず、誇誕を以て有るべからず、勢重を以て脅やかすべからず、必将ず此れを誠にして然る後に就ると。之を争えば則ち失い、之を讓れば則ち至る。遵道なれば則ち積

み、誇誕なれば則ち虚し。故に君子は務めて其の内を脩めて、之を外に譲る。務めて徳を身に積みて、之に処するに遵道を以てす。是くの如くんば、則ち貴名の起ること日月の如く、天下の之に応ずること雷霆の如し。故に曰く、君子は隠るるも而して顕われ、微なるも而して明かに、辞譲するも而して勝つと。（『荀子』儒效篇）

⑦俑（庸）言之信、俑（庸）行之敬

・庸言之信、庸行之謹。（庸言之れ信にし、庸行之れ謹む。）（『周易』乾・文言伝）

・庸言も必ず之を信にし、庸行も必ず之を慎む。（庸言必信之、庸行必慎之。）（『荀子』不苟篇）

この内、特に資料①は、『論語』子路篇や上博楚簡『仲弓』にも類似する文章であり、いずれも政治の要諦を説いたものである。但し、句の構成要素と要素の順序が次のように微妙に異なっている。

『顔淵問於孔子』……敬宥過、而先有司、老老而慈幼

『論語』……先有司、赦小過、舉賢才

『仲弓』……老老慈幼、先有司、舉賢才、宥過赦罪

また、②は、為政者の側が身を修めて率先することにより、民を従わせることができると説くもので、『大戴礼記』の「政の速やかに行われんことを欲する者は、身を以て之に先んずるに若くは莫きなり」という記述に類似する。③は、積極的に民を広く愛すれば、民は親愛の情を忘れないと説くもので、『孝経』の「之に先んずるに博愛を以てすれば、而ち民其の親を遺るること莫し」や、『礼記』哀公問篇の「君子は敬を興して親しむことを為す。……愛せざれば親しまず」や、同・緇衣篇の「民に君たる者は子のごとくして以て之を愛すれば、則ち民之に親しむ」などと類似する文言である。更に⑥は、名声を得た後、身を低くすることによって、却って大いに禄を得ることができると説くもので、一見『老子』の思想を想起させもするが、これも、前記の通り、儒家系文献である『荀子』に、「之と争えば則ち失い、之に譲れば則ち至る」と、類似する思考が見える。

こうした類似現象はどのように考えればよいであろうか。これらは、儒家系文献が形成される途上において、諸文献にまたがる様々な異伝があったことを示唆してい

るであろう。

例えば、資料①で言えば、『論語』は、一時期に孔子の言葉を集めて直ちに完成体に向かったのではなく、弟子たちによって保有されていた孔子の言葉が複数の文献に記録され、微妙に言葉を異にしつつ伝承されていった後、最終的に『論語』として編纂されたと考えられる。『論語』の編纂には複雑な過程があったことが推測されるのである。

また、接続未詳ではあるが、資料⑦も注目される。もし『周易』伝の成立が『顔淵問於孔子』に先行するとすれば、孔子やその弟子たちが『易』を学び、それに類似する言葉をこの文献に記録していたという可能性も考えられよう。

上博楚簡『顔淵問於孔子』と伝世儒家系文献との類似現象は、儒家系文献が相互に影響を及ぼしあいながら形成されていった様子を示唆しているのである。

結　語

以上、本稿では、『上海博物館蔵戦国楚竹書』第八分冊で公開された『顔淵問於孔子』を取り上げ、その内容と思想史的意味、さらには儒家系文献の形成について若干の考察を加えてきた。戦国時代において、「世の顕学は儒墨なり」（『韓非子』顯学篇）とは言われるものの、従来は、儒家の思想的活動の具体的内容を窺い知る資料があまりにも少なかった。そうした中で、上博楚簡に含まれる儒家系古逸文献は、孔子以降の儒者たちがどのような活動を展開したのかについて貴重な手がかりを与えてくれる。上博楚簡には、なお未公開分もあると聞く。それらを含めて、さらに儒家思想の展開を追究してみたい。

注

（1）以下の情報は、『上海博物館蔵戦国楚竹書』第八分冊の説明をもとに、図版・釈文などを確認した上で、筆者が整理したものである。

（2）復旦吉大古文字専業研究生聯合讀書會「《上博八・顔淵問於孔子》校讀」（復旦大学出土文献与古文字研究中心ＨＰ、二〇一一年七月十七日）。

（3）陳偉「《〈顔淵問于孔子〉内事、内教二章校讀》」（簡帛網、二〇一一年七月二十二日）

（4）黄人二・趙思木「《讀〈上海博物館藏戰國楚竹書（八）顔淵問于孔子〉書後》」（簡帛網、二〇一一年七月二十六日）

（5）注（2）の論考に付されたネット上のコメントによる。

（6）注（2）の論考に付されたネット上のコメントによる。

（7）こうした顔淵像の変遷については、衣笠勝美「魏晋・南北朝時代の顔回像」（『新しい漢字漢文教育』第二十六号、一九九八年）、山際明利「宋儒の「屢空」説」（北海道中国哲学会『中国哲学』第二十七号、一九九八年）、柴田篤「「顔子没而聖学亡」の意味するもの」（『日本中国学会報』第五十一集、一九九一年）参照。

【附記】本研究は、平成二十一年度～二十五年度、日本学術振興会科学研究費基盤研究B「戦国楚簡と先秦思想史に関する総合的研究」（研究代表者、湯浅邦弘）による研究成果の一部である。また本稿は、二〇一一年十一月二十七日、台湾大学で開催された「出土文獻研究方法國際學術研討會」において口頭発表した「上博楚簡『顔淵問於孔子』與儒家系統文獻形成史」をもとに、加筆修訂を加えて定稿としたものである。